岸田新総裁に望むこと

コロナ対策の抜本的改革を

医学博士　長尾和宏

嘘をつかない政治に

政府要人はこの「月刊公論」を読んでいると聞く。そこで今回、強い想いで岸田新総裁に望むことを書かせて頂く。総裁に届くことを強く願う。

まずは、嘘をつかない政治に変えて欲しい。国民は、公文書の改ざんや隠蔽、虚偽答弁など嘘にまみれた政治に呆れ果てている。森加計事件がその象徴だが、自死された赤木さんと奥さまにどう向き合うのか注目する。身内をかばわなければならない気持ちは理解可能であるが、そうしたしがらみを超えて1人の人間として、「嘘の連鎖」に真摯に向き合い断ち切って欲しい。国民の心に響く言葉と行動を期待している。

いまや子供達も「嘘つきは政治家のはじまり」と言っている。どこの国でもどんな時代でも政治の劣化や腐敗は永遠の課題かもしれない。しかし「嘘」に慣れきってしまった国家の行く末は「衰退」しかない。しかし岸田総裁は国民の痛みや疑問に寄り添ってくれる政治家だと信じたい。

言論の自由を守れ！

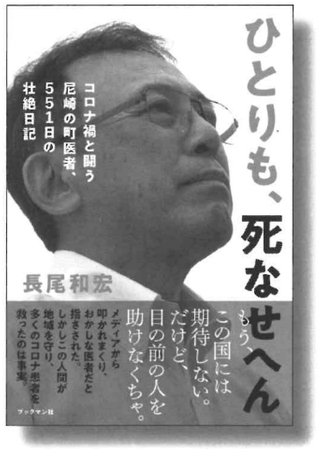
日本は今、深刻な言論の危機にある。具体的にはコロナに関する報道のなかで、ワクチンやイベルメクチンに関する情報は政府が意図的に隠ぺいしている。たとえば、現役のプロ野球選手がワクチン接種して1週間後に倒れて亡くなっても、「ワクチン接種」という情報は意図的に隠ぺいされている。ワクチン接種後の死亡者は厚労省の発表では、約1100人だがすべて「因果関係不明」となっている。「因果関係あり」で国家補償の対象になった人は皆無だ。そもそも「因果関係不明」と断じる根拠とは何だろう。解剖もせずに「不明」と断じる姿勢こそが、ワクチン分断を増幅している。まして、ワクチン死や副作用に関する言論弾圧は第2次世界大戦時の日本を思い出す。ネガティブな情報を隠して朝から晩まで「ワクチン打て打てキャンペーン」に恐怖を覚える市民が増えている。

一方、コロナにはイベルメクチンという特効薬がある。北里大学の大村智先生が発見し、抗寄生虫薬として多くの人の命を救った功績でノーベル賞を受賞した薬だ。イベルメクチンには抗ウイルス作用もあり、新型コロナにも有効である。コロナに対するイベルメクチンの臨床治験は60以上発表されていて、メタ解析でもその有効性が認められている。筆者もコロナ患者さん100人以上に処方して有効性を確認している。しかしイベルメクチン関連記事はテレビや新聞では報道管制がかかっているようで誤った情報で有効性を握りつぶしてきた。ネットメディアではその単語を言うだけで直ちに削除されるという異常事態が1年以上続いている。まさに「言論の自由」という憲法違反が公然と続いているが放置されている。いや、おそらく政府が弾圧しているのだろう。なんのためか。それは新薬の利権、すなわちお金であろう。岸田内閣においては、憲法に書かれている「言論の自由」を真っ先に回復して欲しい。

コロナ対策の抜本的改革を

安倍政権はコロナ禍の最中に倒れ、次に菅政権が誕生した。菅総理はアメリカに渡りワクチン確保に尽力されたが、1年半の我が国のコロナ対策を国民はどう採点するのだろうか。国民の採点は非常に厳しいものだと想像する。

筆者は町医者として1200人のコロナ患者を診断して600人のコロナ患者さんの自宅療養を24時間体制で支えてきた。昨年4月の第1波の時から「早期診断、即治療」を実践し、600人から亡くなった人はいない。この1年半の活動をまとめた書籍「ひとりも、死なせへん」（ブックマン社）が9月14日に発売され重版を重ねている。本書は完全なドキュメンタリーである。「タラレバ」や「後出しジャンケン」ではないことは原本であるブログや500日以上毎日続けている「コロナチャンネル」という動画サイトをご覧頂ければ分かる。感染症病棟という最後の砦だけでなく、開業医による最初の砦の重要性を一貫して説いてきた。早期診断して即治療ができる開業医が増えれば重症者や死者を減らすことが可能である。この8月、報道番組に数回出演し持論を訴えた結果、9月から多くの開業医がコロナ診療に協力するようになった。外来や往診で抗体カクテル療法を行うことも可能になった。



「ひとりも、死なせへん」
長尾和宏著

岸田氏は当選直後の挨拶で「自分は人の話をよく聞くことができる」と明言した。たしかに「聞く力」は政治家にとって大切な素養だ。それが本当であれば、まずは拙書を読んで欲しい。分科会や専門家集団の意見だけでなく、現場の意見にもっと耳を傾けて欲しい。これまでのコロナ対策と「真反対」のことばかり書いているので耳が痛いだろうが、不都合な現実を直視して欲しい。答えは常に現場にある。僕はこの本を100年後の日本人に向けて書いたつもりだった。なぜならコロナ禍のなか、多くの日本人がカミュの「ペスト」を読んだからだ。「ペスト」も現場の記録である。現場を直視することで騒動を鎮静化できる。コロナ政策の抜本改革の第1はコロナを5類にすることだ。そのうえで、政策の目玉である経済安全保障を急ぐべきだ。

長尾和宏
（ながおかずひろ）

医療法人社団裕和会理事長、
長尾クリニック院長

1984年　東京医科大学卒業、大阪大学第二内科入局
1991年　医学博士（大阪大学）授与
1995年　兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業、現在に至る

日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副理事長、全国在宅療養支援診療所連絡会世話人、関西国際大学客員教授

［医学博士］
日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、指導医、日本在宅医学学会専門医、日本禁煙学会専門医、日本内科学会認定医、労働衛生コンサルタント

【著書】
『平穏死・10の条件』、『抗がん剤・10のやめどき』『糖尿病と膵臓がん』など多数。『痛くない死に方』と『痛い在宅医』は、映画化され、2021年春公開。『小説安楽死特区』も即重版し、アマゾン1位。最新作は「ひとりも、死なせへん」。

月刊
世界の視点で情報を発信する総合誌

公論

発行・株式会社財界通信社　令和３年11月1日発行　毎月1回1日発行　第54巻11号
昭和47年11月10日第三種郵便物認可

11
2021
November

提言

コロナから国民の命を守ることが岸田新政権の第１の課題

本誌主幹 **大中吉一**

リレー対談

慶應義塾大学医学部
医療政策・管理学教室　教授
宮田 裕章氏

VS

映画作家
河瀬 直美氏

映画を作り続けることが次の人達へのメッセージに

「いのち」は私たちそのもの自然も動物もそして地球も

連載　政界展望

派閥の狭間で魑魅魍魎が蠢いた自民党総裁選の舞台裏

ジャーナリスト
鈴木 哲夫氏

特別寄稿

日本の新維新に向けて
100代目の首相を選ぶ、自民党総裁選挙に思う

（株）人間と科学の研究所　所長
飛岡 健氏

TOPインタビュー⑮

学生のためになる大学、学生が得する大学でありたい

東京福祉大学・大学院
創立者　総長・学長　教育学博士
茶屋四郎次郎１７代直系
中島 恒雄氏